

通級による指導の充実

特別支援教育課

1 現状

- 通級指導教室を計画的に整備してきており、通級指導教室で学ぶ児童生徒数は増加傾向である。
- 個々のニーズに応じた専門性の高い教育を提供する必要性が高まっている。
- 通級指導教室で学んだ力を通常の学級で活かすことができるようするため、通級指導教室と通常の学級の連携が求められている。

2 具体的な取組

(1) 通級による指導について

【通級による指導】

- ・インクルーシブな教育をさらに推進するため、発達障がい等により特別な教育的ニーズのある児童生徒が、できる限り**通常の学級に在籍しつつ適切な教育が受けられるよう学びの場**を整備するとともに、一人ひとりに応じた学びの場の判断が適切に行えるよう、通級指導教室を増設している。
- ・通常の学級に籍を置き、学習場面や生活場面で生じる困難を改善・克服するために、障害に応じた特別の指導（自分の困り感を先生と共有し、自分に合った学び方や支援ツールの選択肢を増やす 等）を「通級指導教室」といった特別な場で学習する。

【対象者】

- ・通級による指導の対象となる児童生徒の判断や手続きは、文部科学省の通知に基づき、所管の教育委員会によって定められており、希望すれば誰でも受けられるものではない。

【設置教室】

- ・LD 等通級指導教室：自閉症者、情緒障害者、学習障害者、注意欠陥多動性障害者
- ・ことばの教室：言語障害者

(2) 設置状況

	設置校と教室数 (設置校以外から通う他校通級の児童生徒含む)	サテライト教室 (週1～2日、担当者が他校に出向いて指導する教室)
LD 等	小学校：50校 79教室 (1,097人) 123教室 中学校：28校 44教室 (640人)	小学校：64校 (283人) 105教室 中学校：41校 (187人)
ことば	小学校：40校 51教室 (777人) 51教室	小学校：13校 13教室 (72人) 13教室

(3) 通級指導教室担当者の専門性向上のための研修体制

① 新任担当者研修 (新しくLD等通級指導教室の担当者となった教員：対象者30名)

- ・通級指導教室の概要説明、通級指導教室の授業参観、事例検討 等、年間4回程度

② スキルアップ研修 (通級指導教室担当者：対象者174名)

- ・各分野の専門家による講義及び演習、年間4回

③ オンデマンド研修動画による研修

- ・9本の動画を配信 (R6現在) (例) 読み書き指導、ICT機器の活用 多層指導モデル MIM 等

④ 各地区や市町村単位の担当者会の実施

- ・各市町村の取組に関する情報交換、授業参観、事例検討会、外部講師による研修会 等

(4) 指導の工夫

① 学習グループの工夫例

【ソーシャルスキルトレーニングのグループ学習】

- ・ソーシャルスキルトレーニング（注意集中、話を聞く力、コミュニケーション等の課題）をグループで実施。学生ボランティアや地域の先生方の協力を得て実施している学校もある。

【主訴が同じ、実態が似ている児童生徒同士でのグループ（ペア）学習】

- ・読み書きの課題が共通している2名で学習。同じ課題に取り組む時間と、それぞれの課題に取り組む時間をつくっている。

【主訴は異なるが、2名以上を受け入れてのグループ（ペア）学習】

- ・算数のつまずきの部分が異なり、それぞれ違う課題に取り組んでいる。2人は同じ学級であり楽しく学習している。また、担任の負担軽減（時間調整、補習等）にも繋がっている。

② グループ（ペア）学習のメリットとデメリット

- 友達の姿に影響を受けて頑張ろうとする姿、年下の友達を気遣う姿、個別学習よりも緊張感を持って学習に取り組む姿がある。
- 低学年の読み書き指導を小グループで学習することにより、実施回数が増え効果が出ている。
- グループ（ペア）学習での経験が、通常学級での学習や日常生活にも活かしている。
- 「自分だけ個別の支援を受けるのは嫌だ」と感じていた生徒が、似たニーズのある友だちと一緒に学習することにより、個別で通級指導教室に繋がるきっかけとなった。
- ▲ 一人ひとりの実態が違うので、個別指導でやっていることをグループ（ペア）で扱うことは困難。
- ▲ 「先生に話を聞いてほしい」と願っている児童生徒には向かない。
- ▲ 中学生は一緒に活動すること（たとえカードゲームであっても）を嫌がる生徒が多いため、実施するかどうかの判断は慎重に進める必要がある。

③ 通級指導教室と通常の学級の連携の工夫例

- ・通級指導教室の担当者が中心になり、通常の学級で読み書きの学習（多層指導モデルMIM：特殊音節の指導等）を実施し、通常学級でのアセスメントや指導法についてサポートしている。
- ・ICT機器の利活用について通級指導教室で学習の仕方等を学んだことを活かし、通常の学級での利活用を進めているケースが増えている。
- ・「個別の指導計画」の作成を学級担任と通級指導教室担当で分担して作成し、「個別の指導計画」をもとに支援・配慮の調整、本人の特性を前提に有効な支援や環境を共有している。

3 成果と課題

- 児童生徒にとって身近な学校で適切な支援が受けられるよう、通級指導教室の新設校の設置及びサテライト教室の設置が進みつつある。
- ▲ 通級指導教室の設置校に限られているため、同一教育委員会内での調整や隣接する市町村教育委員会同士での協議・連携が必要となる。
- 利用ニーズが高い小中学校へ、担当教員の複数配置を進めることにより、校内でのOJTによる職員研修の体制を整えている学校もある。
- ▲ 児童生徒の多様なニーズに対応するため、担当者に多様な専門性が求められている。
- 児童生徒の多様なニーズに対応するため、学習方法や内容について、研修会や担当者会を通して担当者間で様々な工夫が共有されている。
- ▲ 通級指導教室で学んだことを日常の生活や学習場面で活用できるよう、家庭や通常の学級との連携の在り方について研究を進めていく必要がある。